



ニューズレター



水場にやって来た鳥たち(右からヤマガラ、シジュウカラ、ヒガラ)記事 : P.10



CONTENTS

国際シンポジウム	P2 ~ P3
モニタリングサイト1000の動き	P4 ~ P5
いきものみつけ夏の調査結果	P6 ~ P7
センターの出来事	P8 ~ P9
富士五湖自然保護官事務所紹介	P10
標本の紹介(第16回)	P11

国際的な取組を始めた生物多様性センター

平成20年度から始まった、東・東南アジア地域の生物多様性情報イベントリー整備に貢献する事業の一環として、1月21日(水)に東京都にある国連大学ウ・タント国際会議場で「生物多様性保全のための情報整備と人づくりに向けた国際シンポジウム 東・東南アジアにおける生物多様性の損失を抑える」を開催しました。

2010年に生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)をひかえ、設立から10年が過ぎた生物多様性センターの担う役割にも、国際的な視野のものが含まれるようになってきました。平成21年度からは、地球規模での生物多様性モニタリング体制の構築に貢献する事業も予定されています。今後は国内のみならず、国際的な生物多様性保全について貢献できるようなセンターを目指します。

生物多様性保全のための情報整備と人づくりに向けた国際シンポジウムが開催されました

【開催の経緯】

東・東南アジア地域は、世界的に見ても生物多様性が非常に豊かであるにもかかわらず、それらに関する情報の収集・整備が十分に行われていません。また、生物多様性保全のために必要な分類学の知識と能力を持つ人材が不足しています。

平成20年度から始まった東・東南アジア生物多様性インベントリー・イニシアティブ(East and Southeast Asia Biodiversity Inventory Initiative)事業(以下、ESABII)は、これらの地域の国々、関係機関の参加のもと、生物多様性条約の履行、各国の生物多様性国家戦略の策定・見直し、様々な保全施策等に直ちに利用することができる生物多様性情報インベントリー(1)を整備し、生物多様性保全に必要な分類学の能力向上のための地域行動計画策定とプログラムの実施を推進することで、東・東南アジアの生物多様性保全の推進と生物多様性条約の2010年目標(2)の達成に貢献することを目的とした国際協力プロジェクトです。

「生物多様性保全のための情報整備と人づくりに向けた国際シンポジウム 東・東南アジアにおける生物多様性の損失を抑える」は、このプロジェクトの第一歩として開催されました。

【開催の目的】

このシンポジウムは、東・東南アジアの生物多様性保全の推進と、2010年に生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が日本で開催されることを踏まえ、東・東南アジアの各国とともに生物多様性保全の推進の現状と求められているもの、また、これに対し日本がどのような貢献をすることが可能かを議論するために開催されました。



吉野環境副大臣の開会挨拶

【開催結果】

平成21年1月21日(水)に、東京都渋谷区にある国連大学のウ・タント国際会議場で、吉野環境副大臣の出席のもと、合計128名の方々にご参加をいただきました。

はじめに、兵庫県立人と自然の博物館館長岩槻邦男氏から「持続可能な発展のための生物多様性情報」とのタイトルで基調講演をしていただきました。ついで中国、インドネシア、韓国、ベトナムの生物多様性研究情報拠点からの専門家、生物多様性条約事務局及びASEAN生物多様性センターの専門家、また我が国の分類学及び生態学の専門家計10名による生物多様性情報整備と分類学能力向上プログラムの実施状況に関する講演の後、パネルディスカッションが行われました。

パネルディスカッションでは、保全の現場における生物多様性情報整備の必要性及び分類学的な能力の向上の必要性について活発な議論が交わされました。

また、最後に行われた質疑応答では、熱心な質問が終了時間を過ぎても途切れず、参加した方々の関心の高さを感じることができました。



パネルディスカッション

【専門家会合】

シンポジウム翌日には専門家会合が行われ、ESABII推進のための戦略案が議論され、プロジェクト目標、さらに下位目標として、運営体制の確保、各国、関係機関によるネットワークの構築、情報の共有と提供、生物多様性情報インベントリー整備や分類学能力向上のためのニーズ把握調査及び優先順位の設定、具体的な事業実施に関する方針について有意義な意見が交わされ、戦略案に対し貴重なインプットがなされました。

【施設見学】

専門家会合の翌日には、海外から招待した専門家の方を生物多様性センターまでお連れし、センターの展示施設や標本収蔵庫、そして、わが国の生物多様性や自然環境に関する総合データベースである「生物多様性情報システム(J-IBIS)」を見ていただきました。また、センターの近くにある「河口湖フィールドセンター」で、渡辺館長に富士山麓の自然環境についての説明を受け、溶岩樹形洞穴を見学しました。皆さん研究者らしく好奇心一杯のご様子で、雪の積もった林の中を熱心に歩き回って植物を見たり、溶岩樹形洞穴を利用した胎内神社の中では、溶岩で出来た壁や天井の模様や電灯の明かりの下に生えている苔をつぶさに観察したりしていました。



生物多様性情報システム(J-IBIS)の見学

【今後の展開】

今回行われたシンポジウムと専門家会合で、各国・機関の方々から寄せられたご意見をもとにESABII推進のための戦略を策定し、生物多様性情報インベントリーの整備と、分類学の能力向上のための行動計画策定とプログラムの実施を進める考えです。そして東・東南アジアの生物多様性保全の推進と、生物多様性条約への貢献のため、国際協力体制を築いていきます。

このシンポジウムについては、下記ホームページ

「<http://www.biodic.go.jp/bii/>」

で詳しくご報告しています。

- (1)生物多様性情報インベントリー:生物種やその生息・生育地に係る様々な情報(生態、個体数分布、生息密度、生息環境等)を、生物多様性保全施策に貢献できる基盤情報として集約したもの。
- (2)2010年生物多様性目標:「2010年までに生物多様性の損失速度を顕著に減少させる」ことが2002年(平成14年)にオランダのハーグで開催された生物多様性条約第6回締約国会議(COP6)において採択されました。

プログラム

プログラム		
基調講演	兵庫県立人と自然の博物館	館長 岩槻 邦男
シンポジウムの目的と背景	「東・東南アジアにおける生物多様性情報インベントリー-イニシアティブの目的と背景」	環境省生物多様性センター 阪口 法明
午前の部 生物多様性インベントリーと情報	「生物多様性条約のもとでの世界分類学イニシアティブ(GTI)と東・東南アジア生物多様性インベントリー」	生物多様性条約事務局 志村 純子
	「中国における生物多様性の記録と電子化」	中国科学院植物研究所 Dr. Ma Keping
	「研究資源としてのGBIF及び生物多様性データベース:魚類データベースが解明する黒潮の役割」	国立科学博物館標本資料センター 松浦 啓一
	「ASEAN生物多様性センターにおける生物多様性地理情報システム」	ASEAN生物多様性センター(ACB) Mr. Rodrigo U. Fuentes
午後の部 生物分類学のための キャパシティビルディング	「ベトナムの分類学におけるキャパシティビルディングの必要性」	ベトナム自然資源・環境研究センター(CRES) Dr. Vo Quy
	「西太平洋・アジア地域生物多様性一斉観測(DIWPA-IBOY)と分類学キャパシティ・ビルディング」	北海道大学低温科学研究所 戸田 正憲
	「インドネシアにおける分類学のキャパシティービルディングに向けた国際的プログラム」	インドネシア科学院生物学研究所 Dr. Ahmad Arief
	「生物多様性保全と情報システムの構築」	韓国環境省国立生物資源研究所(NIBR) Dr. Byoung-Yoon Lee
パネル ディスカッション	「大学における生物分類学研究者の育成」	鹿児島大学 鈴木 英治
	インドネシア科学院生物学研究所動物局局長 Dr. Ahmad Arief	
	山階鳥類研究所鳥類標識研究室長 尾崎 清明	
	韓国環境省国立生物資源研究所上席研究員 Dr. Byoung-Yoon Lee	
	生物多様性条約事務局プログラムオフィサー 志村 純子	
	国立環境研究所生物圏環境研究領域長 竹中 明夫	
	北海道大学低温科学研究所教授 戸田 正憲	
環境省生物多様性センター長 鳥居 敏男		

モニタリングサイト1000の動き

1 モニタリングサイト1000 国際シンポジウムが開催されました

モニタリングサイト1000では、地球規模で渡りをするガンカモ類とシギ・チドリ類についても調査の対象としていますが、その渡りの変化をより正確に評価するためには、我が国だけでなく海外も含めたフライウェイ(鳥の渡りのルート)全体の生息状況を把握する必要があります。

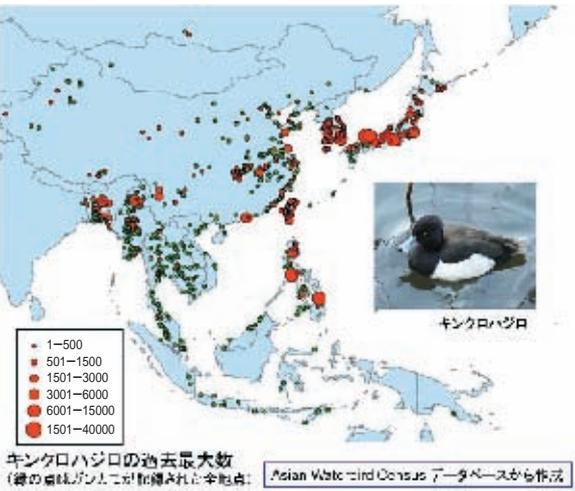
そこで、ガンカモ類及びシギ・チドリ類の現在の生息状況を把握し、より精度の高いデータ収集と情報共有化に向けた課題を抽出し、それらの解決に向けたアジア地域における国際連携のあり方を探ることを目的に、各国の有識者による専門家会合と国際シンポジウムが平成21年1月30～31日に福岡県福岡市の福岡国際会議場において開催されました。

30日に開催された専門家会合では、ロシア、モンゴル、中国、韓国、台湾、オーストラリア、日本の7つの国と地域からの参加を得て、各国における生息状況や調査体制に関する現状や共有すべき情報、地球規模で生息状況を把握する上での課題について、その対策事例等も含め、有識者による具体的な意見を交わすことができました。

31日は「アジア・オーストラリアを渡る水鳥たちのフライウェイ～そのモニタリングと国際連携～」と題した国際シンポジウムが開催されました。約130名もの参加を得ることができ、改めてガンカモ類、シギ・チドリ類に対する注目の高さが伺えました。講演では、ロシア、韓国、中国、オーストラリア及び日本における渡り性水鳥類の生息状況や、各国で実施されている調査について報告が行われました。日本からの報告としては、モニタリングサイト1000のガンカモ類調査及びシギ・チドリ類調査の事務局を担当するバードリサーチより、国際湿地保全連合が取りまとめているアジア水鳥センサス(AWC)に集約された各国のデータとモニタリングサイト1000のデータとの比較結果が発表されました。オオハクチョウとコハクチョウの越冬地が比較的明確に分かれていることや、キンクロハジロが越冬期にフィリピンまで南下していること、チュウシャクシギやキョウジョシギはオーストラリアまで渡って越冬しているようで、日本における春と秋の個体数が大きく違うのは北上と南下でフライウェイが異なるからではないか等、日本で見られるガンカモ類やシギ・チドリ類が地球規模で見るとどのように暮らしているのか、見えないフライウェイを想像しながら、新しい発見をしていただけたものと思います。

各国の有識者からの講演の後に行われたパネルディスカッションでは、日本、韓国、オーストラリアの有識者と環境省から野生生物課長とが参加し、フライウェイ全体の生息状況を把握する上での課題や、共有すべき情報について、会場も巻き込んだ活発な意見が交わされました。現状の課題としては大きく分けて3つ、調査地の設置と方法上の課題、調査をする人材の確保・育成上の課題、情報共有とネットワーキングにおける課題が抽出されました。

生物多様性センターでは、ガンカモ類とシギ・チドリ類の国際的な生息状況把握における現状と課題及びその対策について、今回の専門家会合及び国際シンポジウムにおける議論も踏まえ、報告書として取りまとめる予定です。



パネルディスカッションの様子



講演の様子

2 モニタリングサイト1000のロゴマークが決定しました!

平成15年度より始まったモニタリングサイト1000ですが、このたび約1000箇所の調査サイトの設置を達成したことを記念して、モニタリングサイト1000のロゴマークを平成20年10月14日～12月1日まで公募したところ、150名から計202点の応募がありました。

その中から、モニタリングサイト1000のコンセプトにふさわしい、日本の多様な自然環境や生態系、そのモニタリングの重要性を表現した作品を選考した結果、最優秀賞が決

まりました。

このロゴマークの使用をご希望される方は、モニタリングサイト1000のホームページ(ロゴマークについて <http://www.biodic.go.jp/moni1000/logo/>)をご参照いただくか、生物多様性センター 生態系監視科(0555-72-6033)までご連絡ください。

今後、モニタリングサイト1000の普及のためにロゴマークが活躍します!



あきやま としき
秋山 理樹 様(埼玉県)

▶作品のコンセプト

ロゴマークは日本の自然を大事に見守る「目」をモチーフに図案化したものです。モニタリングサイトが、協力者一人一人の観察・調査によって成り立っていることを意味しています。

緑色のマーク上部は山、森林、里地里山を、青色の下部は河川、湖沼、海岸を表し、両者で豊かな自然環境や生態系を表現しています。中央に置かれたオレンジ色の瞳は、生命のエネルギーをあらわすとともに、人々のあたたかい目を表現しています。

3 モニタリングサイト1000の新規サイト設置しました

地球温暖化の影響に対して脆弱な高山帯の調査を開始するため、平成20年度から調査対象、調査手法、サイトの選定について検討をはじめました。これまでに3回の検討会を開催し、積雪量や調査実施可能性等を考慮して、典型的な高山帯として大雪山、北アルプス(立山等)、白山、南アルプス(北岳)の4サイトを、特殊な高山帯としては富士山を選定しました。平成21年度は、白山と南アルプスで試行調査を実施し、調査方法を具体化していく予定です。

さらに、平成19年度から検討していた磯、干潟、アマモ場及び藻場生態系を含む沿岸域調査では、平成20年度から本格調査を開始しました。また、湖沼及び湿原生態系を含む陸水域調査では、サイトの選定を行いました。

沿岸域調査では、全国を6つの海域に区分し、磯、干潟、アマモ場及び藻場のそれぞれの生態系に6サイト程度、合計26サイトを設置して、そのうち20サイトについて調査を開始しました。その結果の速報については、モニタリングサイト1000のホームページに掲載しています。

陸水域調査では、淡水湖沼として摩周湖や琵琶湖等14サイト、汽水湖沼として厚岸湖や中海・宍道湖等6サイト、計20箇所の湖沼サイトと、釧路湿原や尾瀬ヶ原等、計10箇所の湿原サイトを選定しました。平成21年度は試行調

査等を実施していく予定です。

高山帯等の新規サイト設置を踏まえ、モニタリングサイト1000のサイト数は、1023サイトになりました(平成21年2月末現在)。

モニタリングサイト1000に関する最新の情報は、生物多様性センターホームページ([URL:http://www.biodic.go.jp/moni1000/](http://www.biodic.go.jp/moni1000/))でご覧になれます。



志津川(宮城県)の藻場サイト 写真提供:坂西芳彦氏



いきものみつけ
www.mikke.go.jp

夏の調査結果を取りまとめました!

生物多様性センターでは、2008年7月から、市民参加のいきもの調査(愛称:「いきものみつけ」)を実施しています。夏の対象いきものは、ミンミンゼミ、ツクツクボウシ、クマゼミの3種。これらのゼミの鳴き声を聞いた日と場所の情報を募

集したところ、全国の皆さんから合計9,335件の情報が集まりました。調査に参加してくださった皆さん、ご協力ありがとうございました。寄せられた情報を基に、初鳴き日とクマゼミの分布の解析結果を取りまとめましたのでご報告します。



ゼミの初鳴き日

「ミンミンミン」とミンミンゼミが鳴き始めると夏が来た!と感じますよね。いきものたちは気温など自分たちのすみかとなる環境の変化を敏感に感じながら生活しています。そこで、夏のいきものみつけでは、気温の変化によってゼミたちの初鳴き日に変化がみられるかどうかを調べました。2008年の初鳴き日の結果を、1995年の結果()と比較してみたところ、ミンミンゼミとツクツクボウシは、都道府県による初鳴き日の変化に傾向はみられなかった一方、クマゼミについては多くの府県で

早くなる傾向がみられました(図1)。この結果をみますと、同じゼミ類でも気温への反応は種によって様々なようです。クマゼミは羽化直前の5月や6月の平均気温と初鳴き日との関係が強い種であることが気象庁のデータから分かっていますが、今回調査した2008年の気温が1995年に比べ高くなったことから、初鳴き日が早くなる傾向がみられたのだと考えられます。(注)使用したデータは、環境省が1995年に実施した身近な生きもの調査(ゼミのぬけがら)です。



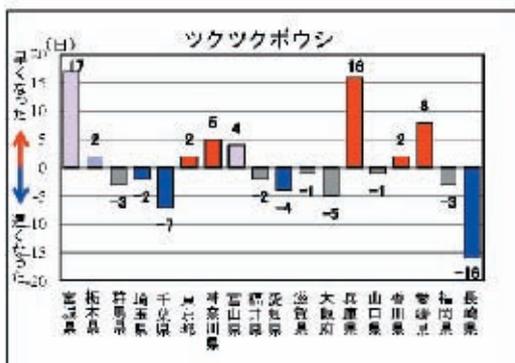
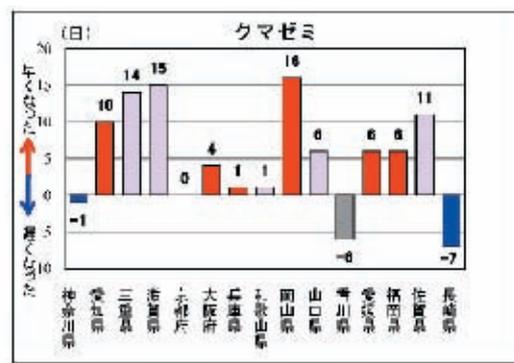
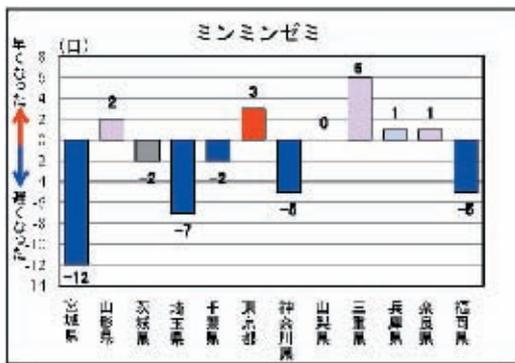
ミンミンゼミ(写真提供:福富孝義氏)



ツクツクボウシ(写真提供:福富孝義氏)



クマゼミ(写真提供:福富孝義氏)



早くなった日数
 ■ 投票数が10件以上のデータ
 □ 投票数が10件以下のデータ
 遅くなった日数
 ■ 投票数が10件以上のデータ
 □ 投票数が10件以下のデータ

図1. ゼミ類の初鳴き日の比較

※1995年と比較した2008年の初鳴き日の日差



クマゼミの分布の結果について

最近、新聞などで地球温暖化等による分布域の北上について話題にあがるクマゼミですが、実際は変化しているのでしょうか? いきものみっけでもクマゼミの分布を調べてみました。その結果、定着していると思われる個体だけを見ると、ここ17年くらいでは急激な分布の拡大傾向はみられませんでしたが(図2)。ただし、飛び地的な報告が北陸地方や関東北部の3地域からそれぞれ1件ずつありました。クマゼミの分布域の北上は、地球温暖化によって暖かくなったために生息可能な地域が増えるという原因だけでなく、

植木や土砂の移動などで人為的に持ち込まれたという原因も指摘されています。しかし、今後地球温暖化で気温が上昇すると、持ち込まれた地域において、定着することのできる個体が増えてきて、結果的に分布が広がってしまうこともあるでしょう。今回、飛び地的に報告のあった北陸や関東北部の地域でクマゼミが本当に定着しているのか、詳細な調査を重ねる必要があります。そこで、今年の夏のいきものみっけもクマゼミを対象とし、情報を募集しますので、是非ご協力ください!!

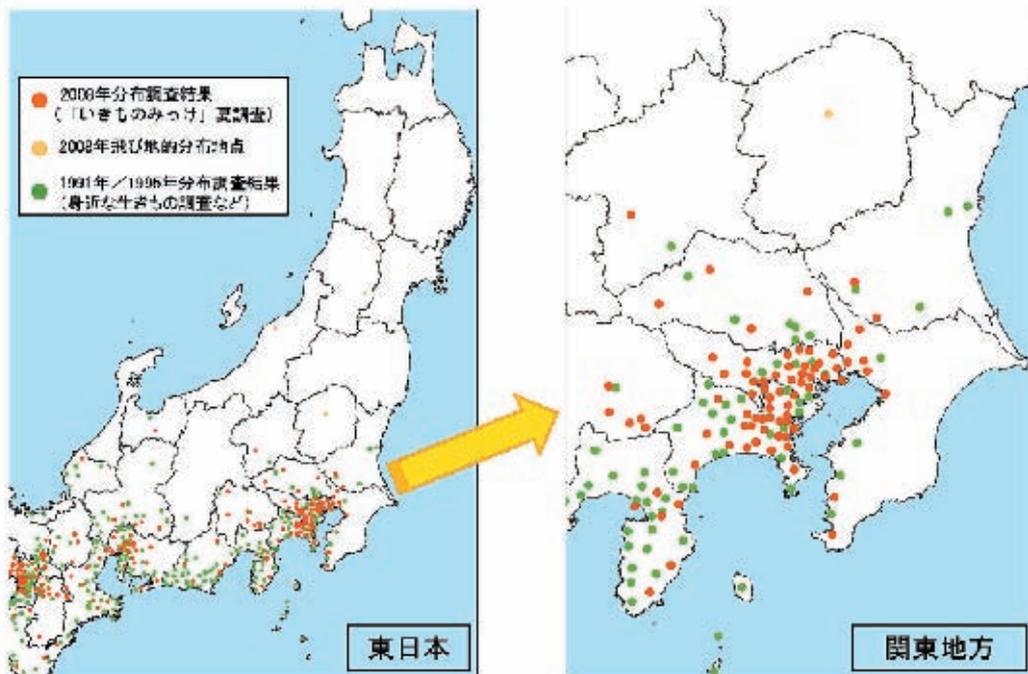


図2.クマゼミの分布の比較



いきものみっけに参加しませんか?

いきものみっけでは、5月末まで、春の調査を実施しています。「ウグイスのさえずり」、「フキトウの芽生え」、「モンシロチョウ」をみつけて、いきものみっけにご報告ください。多くの情報が集まることで、より正確な「いきもの地図」を作ることができますので、1人でも多くの方々のご参加をお待ちしています。

また、2009年度調査もいよいよ6月から開始します。対象種もたくさん増えて、いきものをみっけに出かけるのが楽しくなる企画を展開していく予定です。みんなで「いきものみっけ」で、地球温暖化と生物多様性について考えてみませんか?

下記の可能な方法でご参加下さい。

公 式 サ イ ト	http://www.mikke.go.jp (「いきものみっけ」で検索できます。)
携 帯 電 話 サ イ ト	http://m.mikke.go.jp
郵便・FAX参加の資料請求先	「いきものみっけ」事務局
	TEL:03-3568-4131、FAX:03-3568-4132

センターの出来事

1 出前講義やっています

昨年6月に生物多様性基本法が施行され、その中で国が作成する生物多様性国家戦略を基本として、都道府県や市町村でも生物多様性の保全と持続可能な利用に関する基本的な計画である「生物多様性地域戦略」を定めることが唱われています。また近頃では、ニュースや新聞な

どで生物多様性がとりあげられる機会が少しずつ増えています。これに伴ってでしょうか、最近、地方公共団体や市民団体から、「生物多様性について話をしたい」という要請が寄せられるようになりました。ここ半年くらいの対応状況は、次のとおりです。

日 時	講座等名称、開催場所	参加者
平成20年7月12日(土)	えひめ環境大学(松山市)	約100名
10月18日(土)	熊本県自然環境講座(熊本市)	約70名
平成21年2月 7日(土)	第5回 チョウ類の保全を考える集い(小田原市)	約50名

生物多様性の普及啓発は、当センターの重要な役割の一つですので、このような要請に対してはできるだけ対応していきたいと考えています。ご要望がございましたら、生物多様性センター(0555-72-6031)までご連絡ください。

2 小立小学校の6年生が環境学習を行いました

1月27日に富士河口湖町立小立小学校の6年1組・2組の約80名、担任の先生方4名が来訪されました。今回の目的は主に人と環境の関わりについての学習とのことで、当センタースタッフが授業を行い、常設展示室を案内しました。授業では小学生にも理解しやすいように絵や写真を多く使った資料を用意し、特に生物多様性が人の生活に深く関わっていること、今その生物多様性が危機的な状況にあることを説明しました。見学と授業の後、各自で学習したことをレポートにまとめておられました。私たちスタッフにとって小学生向けの授業を行うことは簡単ではありませんが、生徒の皆さんにとって生物多様性について学ぶよい機会となるよう、今後も工夫を重ねていきます。



3 職員向け“地理情報システム(GIS)講習会”の開催

2月4日から6日までの3日間、生物多様性センターにおいて環境省の自然環境保全担当職員を対象とした地理情報システム(GIS)講習会を実施しました。

生物多様性センターでは、自然環境保全基礎調査等の調査結果をGISデータとして取りまとめた自然環境情報GIS(第2版)を整備し、インターネットを介して一般に公開しておりますが、この講習は、環境省の職員がGIS化された環境情報を業務において活用すると共に、自然環境保全の現場でGIS情報の作成者となり、GISを活用して情報発信をしてゆくための技術習得を目的としています。

講習会では、GIS入門として情報の地図化に伴う地図表現の基礎から始まり、ソフトの基本操作、サンプルデータ

や既存資料のGIS化まで行いました。

今回の講習会では、生物多様性センター職員の他、環境省自然環境局や地方環境事務所等から10名の職員が参加しました。参加職員の業務は、国立公園や標本資料の管理、自然環境行政の啓発、希少野生動植物種、生態系等の調査、自然環境保全施策の計画策定等と多岐にわたっていましたが、講習最後の討論では、各業務でのGIS化できる、又はGIS化したい情報や、分析対象や重ね合わせ資料として入手したいGIS情報が挙げられ、GIS化の有用性と利便性を実感してもらうことができました。今後とも生物多様性センターでは、自然環境保全に利用していただく情報の整備と提供に努めていきます。

4 平成20年度JICA生物多様性情報システム研修を受け入れました

平成20年度9月16日から11月8日まで、国際協力機構(JICA)の「生物多様性情報システム研修」が実施されました。この研修は、生物多様性条約等に基づいて各国の生物多様性に関する情報ネットワーク構築が推進されることを目的とするものです。今年度は、7カ国(アルゼンチン・ブルキナファソ・ガボン・マレーシア・サモア・タンザニア各1名、インドネシア2名)の政府や調査研究機関などで生物多様性保全に携わっている職員が来日し、生物多様性センターでは、研修課程の約半分を担当しました。

当センターでの研修は、前半の実例学習と後半の企画作成に分かれ、前半、研修員は、環境省が全国の生物多様性の状況把握のために行ってきた自然環境保全基礎調査や、我が国の生態系を長期的に継続して監視することでその変化を捉えるモニタリングサイト1000事業、インターネットを介してGISも含めた各種情報を提供する生物多様性情報システム(<http://www.biodic.go.jp/J-IBIS.html>)など、日本の生物多様性情報の整備・運用状況について学び、

互いの国の生物多様性保全の実情について報告、意見交換を行いました。

後半では、生物多様性に関する情報ネットワーク構築について、各自が帰国後に自国で企画提案を行うための、アクションプランを作成し、発表を行いました。いずれの研修員も、自国の実情や業務の内容に応じた、充実したアクションプランを成果としてまとめられました。

また、環境省関連業務の見学として、モニタリングサイト1000の里地調査サイト、所有・所管が混在する日本の国立公園(富士五湖、知床、釧路湿原)ビジターセンターにおける環境教育の見学等を行い、日本の多様な自然に触れながら地域の自然保護の取り組みと課題についても学習しました。

研修員の皆さんは、休日などには様々な場所を訪れて日本の風物に触れ、日本での滞在を有意義に過ごせたようです。一方、当センターの職員にとっても、各国で生物多様性の保全に取り組む人々と交流する貴重な機会となりました。



生物多様性センタースタッフとの集合写真



知床での野外講義

5 第11回自然系調査研究機関連絡会議(NORNAC)調査研究・活動事例発表会の開催

第11回自然系調査研究機関連絡会議(以下、「NORNAC」)及び調査研究・活動事例発表会が岡山県自然保護センターと生物多様性センターの共催により、平成20年11月27日、28日に岡山県岡山市及び和気郡和気町において開催されました。

1日目の調査研究・事例発表会では、14機関から15題の活動事例発表があり、全国各地からNORNAC構成機関のほか、都道府県の自然保護担当者や行政機関関係者、研究者、地元の市民等、約90名が参加し、調査研究に係る情報交換を行いました。参加者からは、「各機関の具体的な活動内容をまとめて聞くことのできる機会となった」「(調査研究を行う上で)問題点や解決法には共



NORNAC連絡会議の様子

通点が多いことが分かり、今後の参考になった」等の感想があった他、「発表に際し、共通のテーマを設けてはどうか」「ポスター発表を活用した効率的な発表を考えてもよい」等の意見が出ました。

2日目はNORNAC構成機関による連絡会議を開催しました。連絡会議には、NORNAC構成団体のほか、オブザーバーとして、今回NORNACへの新規参加を表明した機関、都道府県自然環境行政担当者等あわせて約50名が出席し、今後のNORNACの活性化、および参加機関の増加に伴う開催方法の見直し等について、活発な意見交換が行われました。

平成21年度の「第12回自然系調査研究機関連絡会議」は、神奈川県自然環境保全センターと生物多様性センターの共催を予定しております。

http://www.biodic.go.jp/relatedinst/rinst_main.html

富士五湖自然保護官事務所です

こんにちは。富士五湖自然保護官事務所の自然保護官、木村元です。

自然保護官事務所は全国各地に配置されており、国立公園や野生生物保護などの自然環境保全の業務を担当している環境省の現場事務所です。

富士五湖自然保護官事務所は環境省生物多様性センターの2階にあり、富士箱根伊豆国立公園の富士山地域のうち、山梨県側を担当しています。ここでは、国立公園の保護と利用のための様々な業務を行っています。例えば、保護の面では大規模な開発などが行われるときには自然保護官がその内容を確認し、風景や生物への影響を無くしたり抑えるよう指導したり、利用の面では富士山に登山

者カウンターを設置し登山者数のデータをとったりしています。また、地元市町村などの行政機関や山小屋などの事業者の方々と環境保全協議会を構成し、登山道清掃や富士山登山者へのアンケートなどの事業をしています。

自然保護官事務所の業務は、全国的な調査や普及啓発などを実施している生物多様性センターの業務とは、内容が大きく違いますが、日本の自然や生物多様性を保全するという目的は共通です。生物多様性の保全はみんなが気づき、行動していくことからスタートとなります。豊かな自然環境を未来に引き継いでいくために、いろんな立場でできることから取り組んでいきましょう。



晴天の富士山



登山者カウンターの設置

鳥のための水場を設置しました

生物多様性センター周辺は、溶岩質の土壤であるため水がしみこみやすく、また川も近くにないため、鳥たちは深刻な(?!)水不足に悩まされています。そこでセンターでは、職員用北側駐車場裏の林に「水場」として陶器の器を設置しました。林の縁に設置したので、センター内から観察することもできます。

設置してすぐは水場の存在に気付かなかった鳥たちも、今では水を入れた途端、我先にと集まってきます。12月中旬に設置して以来、確認された鳥類は8種で、主にヤマガラ・シジュウカラなどが多いようです。他にツグミ・シロハラも観察されています。常に観察しているわけではないので、もっとたくさんの種類の鳥たちが利用しているかもしれません。センターは国立公園内にあるため、エサなどは置いてはい

ません。それでも、多いときには10数羽が順番待ちをしながら水浴びをし、のどの渴きを癒しています。その光景はとても微笑ましく、センター職員も癒されています。

鳥類の観察といえば双眼鏡を片手に山や草原を散策もしくは海辺や河川で水鳥観察などが主流ですが、小さな水場を設置して、鳥がやって来るのを気長に待つのも、バードウォッチングの1つの楽しみ方ではないでしょうか。



水を飲みに来たエナガ

多様性センターに収蔵している標本の紹介 第16回



アホウドリ標本(当該標本は亜成鳥のため、黒い羽毛が多い。)

和名 / アホウドリ
 RDBカテゴリー / VU(絶滅危惧 類)
 学名 / *Phoebastria albatrus*
 英名 / Short-tailed Albatross
 分類 / ミズナギドリ目アホウドリ科

 大海原を滑空するハンググライダー

北半球では3種類のアホウドリ類(アホウドリ・コアホウドリ・クロアシアホウドリ)が生息していますが、日本はそれら3種すべての営巣地を持つ唯一の国となっています。いずれの種も外洋を主な生活の場とするため、一般の方がアホウドリ類を見る機会は限られています。外洋を航行するフェリーに乗ると、アホウドリ類に出会えるチャンスがあります。運良く出会うことができれば、アホウドリ類の飛び方に注目してみてください。ほとんど羽ばたくことはないのですが、長い翼を巧みに利用して風を捉え、高速度で飛んでいます。まるで大海原を自由に滑空するハンググライダーのようです。環境省の人工衛星追跡による結果では、伊豆諸島から千島列島を経てアリューシャン列島にまで飛行していることが確認されており、これは海上におけるアホウドリ類の飛行能力の高さを証明しています。



飛翔するコアホウドリ



全身が真っ黒のクロアシアホウドリ

 絶滅の危機から脱しつつあるアホウドリ

アホウドリが絶滅の危機に瀕していたことはよく知られていると思います。明治時代に羽毛を採取するために人間によって大量に捕獲され、1949年には絶滅宣言が出されたこともありました。その後僅かに生き残っていた個体群が伊豆諸島鳥島で発見され、保護増殖の取り組みが進められた結果、現在では2000羽を超えるまでに個体数は回復しました。2008年からは、活火山である伊豆鳥島から噴火の心配のない小笠原諸島^{むこ}賀島にヒナを輸送して新たな営巣地を作る事業が行われており、アホウドリの生息状況はますます安定することが期待されます。ただし、依然として漁業による混獲や海洋汚染等の影響を受けており、個体数も限られていることから、引き続き保護増殖の取り組みを実施していく必要があります。



小笠原諸島賀島に輸送されたアホウドリのヒナ

 多様性センターでの収蔵標本の役割

野生生物の現状に関する情報を広くお伝えし、学術的な研究を推進するために、当センターでは、日本の生物多様性の豊かさを象徴する野生生物の標本を収蔵しています。また、必要に応じて博物館や研究機関への貸出を行っています。ご関心を持たれましたら、当センターの標本担当までお問い合わせください。



増設された太陽光パネル

生物多様性センターには、4.4kwの太陽光発電設備が設置されていましたが、平成20年度、新たに30kwの太陽光発電設備が増設されました。一般家庭用が3kwですから、その約10倍の規模になります。CO2換算すると年間約1tのCO2が削減できるそうです。

更にセンターは標高1,000mにあり、障害物や空気中の塵も少なく、大変太陽光発電に適した立地にあるとのこと。街中だと最大70%くらいの発電効率に対し、ここですと発電効率が100%近くなることもあるそうです。ちなみに富士山頂だともっといいみたいですね。

太陽光発電された電力は、40インチのモニターで毎日の発電状況、日射量など数値やグラフで分かりやすく表示されています。モニターは受付横に設置されています。ご来館の際には、今どれだけ発電されているのか体感されてみては如何でしょうか。

センターの動き

- 9/16 - 11/ 8 JICA生物多様性情報システム研修
- 9/ 30 JICA中南米環境教育研修
- 9/ 30 植生ブロック会議(中国四国)
- 10/22 - 11/ 5 植生ブロック会議(北海道、東北、関東、中部)
- 11/10 JICA環境教育研修
- 11/12 モニタリングサイト1000高山帯調査第2回検討会
- 11/18 モニタリングサイト1000
森林草原調査一般サイト検討会
- 11/20 植生ブロック会議(九州沖縄)
- 11/27 - 11/28 第11回自然系調査研究機関連絡会議開催(NORNAC)
- 12/ 3 JICAマレーシアBBEC研修
- 12/ 3 北海道版「いきものみつけ」シンポジウム
- 12/ 8 いきものみつけ第2回検討会
- 12/ 8 モニタリングサイト1000沿岸域調査第2回検討会
- 12/12 モニタリングサイト1000海鳥調査検討会
- 12/12 モニタリングサイト1000第1回情報管理検討会
- 12/13 宮崎版「いきものみつけ」シンポジウム
- 12/15 自然環境保全基礎調査第1回
自然環境概況調査第1回作業検討部会
- 12/19 鳥類標識調査第1回検討会
- 1/ 7 モニタリングサイト1000国際連携第2回検討会
- 1/15 ガンカモー斉調査(山梨県)に参加
- 1/20 - 1/23 生物多様性保全に向けた情報整備と
人づくりのための国際シンポジウム ほか
- 1/22 モニタリングサイト1000高山帯調査第3回検討会
- 1/26 モニタリングサイト1000ウミガメ調査検討会
- 1/29 - 2/ 2 モニタリングサイト1000国際シンポジウム ほか
- 1/31 高知版「いきものみつけ」シンポジウム
- 2/ 1 神奈川版「いきものみつけ」シンポジウム
- 2/ 8 和歌山版「いきものみつけ」シンポジウム
- 2/ 9 モニタリングサイト1000里地調査検討会
- 2/20 いきものみつけ第3回検討会
- 2/23 - 3/ 2 植生ブロック会議(関東、中国四国、九州沖縄)

案内図



発行：環境省自然環境局生物多様性センター

〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田剣丸尾5597-1

電話：0555-72-6031 FAX：0555-72-6032

URL：http://www.biodic.go.jp/

ニュースレターは下記URLからもご覧いただけます。

URL：http://www.biodic.go.jp/center/news/